

平成29年度 府立桃山高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

実施段階

評価の基準 A：十分達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：ほとんど達成できなかった

分掌領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
教務部	あらゆる教育活動を通して創造性あふれる心豊かな人間の育成を目指す。	分掌、教科、及び各種会議と連携を取り、行事等を調整して計画する。そのため教科主任会を授業時間内に設定する。	A	B	・授業・学校行事・SSH・特別活動・部活動等を通して生徒一人ひとりの能力を伸ばすことができた。各分掌と連携を深め、様々な活動がさらに有機的に結びつくように課題を精査し、実施時期等の検討が必要である。生徒の課題や状況が大きく変化しているので、過去にとらわれずに現状にあった指導方法の実践に努めるとともに、それに伴って事務作業の簡素化を図ることが必要である。 ・時間割変更や授業時間内模試の監督割り当てを教務部が窓口となって一括して行うようにした結果、授業変更等に関するミスを防ぎ、教員の負担を軽減することができた。 ・次年度から始まる学校等欠席者・感染症情報システム(サバ'イ'ス)や調査書様式の大幅な変更に伴う校務システムとの合理的な運用方法について検討が必要である。
		1、2年次における模擬試験等の成績推移を随時分析し、進路指導部と連携して課題の早期発見と対策を考える。	B		
		様々な活動や取組状況の把握に努め、教職員への情報提供とコンセンサスの共有を図る。	B		
	生徒の進路希望と将来を見据えた魅力的な教育課程を編成する。	現行教育課程について、カリキュラム検討会議や教科主任会議で課題を検証し対応を考える。	A	B	・平成31年度入学生教育課程を検討し原案を作成した。今後、新学習指導要領や大学入学共通テストを含む大学入試の大幅な変更に対応したカリキュラムのさらなる検討が必要である。 ・平成30年度1年生から調査書の大幅な変更(項目細分化と枚数制限の撤廃)が行われることにより、高校3年間の活動実績等の蓄積が必要になる。進路指導部と相談しながら外部のシステム利用も検討する。
		平成30年度入学生の教育課程の編成にあたり、各教科や進路指導部及び教育企画推進部と連携して、生徒の進路希望実現に対応したカリキュラムの具現化に努める。	B		
		他校や教育関係機関などと連携を深め、教育課程の研究に努める。	B		
	自主自律の精神のもと、主体的・対話的に学ぶ態度の育成を目指す。	シラバスを活用した主体的・自発的な学習態度の育成を図る。また、手帳を活用して日々の生活や学習計画をデザインさせ、自主(家庭)学習の強化に努める。	B	B	・自習学習振の振り返り週間を設定し、自習学習の強化に努めたが、年間を通した実施はまだできていない。今後は指導内容や実施方法を検討し、来年度は年間5回の実施を目指す。 ・学習の状況が振るわない生徒への対応については、担任を中心に丁寧に進め、一定の成果が見られたが、学校を休みがちな生徒への対応については、さらに保健部と連携しながら、課題解決に向けた対策を充実させていく必要がある。 ・春と秋に2度の公開授業週間を設定した。春は教科会議の時間に公開授業を設定した結果、多くの参観があり、教科内で反省会等をもつなどして授業改善に繋げることができた。秋は一人1時間の公開授業を全教員が設定し自由に参観する形式をとった。来年度は、「主体的、対話的で深い学び」に結び付けるための教員研修の機会となるように実施方法を検討する。 ・評価方法についてはルーブリックの作成など、今後へ向けて議論を深めていく必要がある。
		担任と連携して学習状況の振るわない生徒を早期に把握し、課題解決に向けた対策を充実させる。	B		
		研究授業、授業評価、教員研修などを活用して授業改善を図る。特に、研究授業の実施方法を検討する。チャイムと同時に授業を始められるよう(ベル着)、教員全体で指導の意思統一を図る。	B		
		各科目の評定分布を集約し、生徒全体の相対的な学力を踏まえ、適切な評定の付け方について教員全体で共通理解を図る。観点別評価の完全な実施に向けて研修を深める。	B		
生徒指導部	文武両道・自主自律の精神を育む。	基本的生活習慣の確立のため、全教職員による朝の登校指導を徹底する。制服の正しい着用と身だしなみの指導を徹底する。	A	B	・全教職員体制で朝の校門指導ができた。ほぼ制服の正しい着用品ができた。 ・学校行事には例年通り、多くの生徒が積極的に参加した。新たなリサイクル活動や校外でのシンポジウムに参加したりと活発に生徒会活動ができたが、今後は一人一人が主体的に取り組み、自己肯定感を高める取組へと発展させていくことが必要である。 ・部活動の加入率を高水準に維持できた。
		学校行事をさらに充実させる。生徒会活動及び各種委員会活動の活性化を図る。	B		
		部活動の入部率を高水準に保ち、文武両道を具現化する。	B		
	規範意識を高め、良識ある人間性を構築する。桃山高校生として自覚と誇りを持たせ、責任ある行動を身に付けさせる。	交通法規の遵守と交通マナーを高める指導を徹底する。	A	B	・次年度からの自転車保険加入義務化に伴うオリエンテーション等を通じて自転車の安全運転への意識向上が図れた。登下校のマナーについては改善が見られるものの、さらに一人一人の意識向上につながる指導を行ってきたい。 ・必要に応じて適宜、情報モラル向上の注意喚起ができた。また、授業中にうっかり鳴動させてしまうケースは減少した。 ・防犯意識を高める指導など、安心・安全な学校づくりに努めたが、盗難被害が出るなど、さらなる指導の徹底が必要である。
		不適切なSNSへの投稿等を含むスマートフォンの使用に関する指導を徹底する。	B		
		性犯罪の被害防止に努め、特に早い情報収集と全校生徒への注意喚起を徹底する。薬物乱用の未然防止に係わる啓発活動を徹底する。貴重品の管理や防犯意識を高める指導を徹底する。	C		
	人間の尊厳に対する自覚を高め、自他の生命と人権を尊重する態度を育成する。	いじめ・悪戯・中傷や人権を脅かす行為に対する厳しい指導を徹底する。また、他分掌と連携し被害生徒に対するサポートを行う。	B	B	・6月、11月に生徒全員に実施する「いじめ調査」により実態の把握に努めるとともに、校内連携のもと早期対応に努めた。

評価の基準 A：十分達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：ほとんど達成できなかった

分掌領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
進路指導部	生徒一人ひとりの希望進路実現に向けて方策を講じる。	通年補習（早朝、放課後、土曜日）、長期休業中補習（夏期、冬期）、国公立二次対策補習（1・2・3月）、個別指導（日常、面接、小論文）を充実させる。	A	B	- 様々な進学補習については、多くの教員の協力の下、学校として一定の形が構築できた。3年生の土曜学習会については、多くの生徒が受講できる体制を作ることができたが、回数を重ねるにつれて受講生徒が減少する傾向が見られ、より充実した土曜学習会を考えていく必要がある。 - 模擬試験については、部活動の公式戦等との関係で当日受験できない生徒のフォローが徹底できないことがあり、運営について他分掌との連絡が不十分だった点があった。 - 自習室においては、生徒から「相談可能な自習室」を要望する声がある。施設に限りがあるが、来年度に向けて検討していきたい。
		模擬試験を有効に活用できるよう時期や模擬試験内容を検討するとともに、部活動と両立できるようにできる限りの方策を講じる。また、結果について分析を行い、進路指導につなげる。	B		
		自習室を開放し、学習アドバイザーを有効に活用し、生徒たちが学習する環境を整える。	B		
	キャリア教育の観点に基づく生徒のキャリア形成と教職員への啓発を行う。	小論文・志望理由書などの講習会や模擬試験を行い、生徒たちが自分の将来像を描く手がかりを与える。	A	B	1年生で「小論文」、2年生で「志望理由書」の指導を、外部講師も含めて系統的に行った。 - 全教職員に対して「小論文等指導研修会」を実施した。今年度は大学で経験がある本校教員を講師として、実際の大学の採点に対する考えなどを学び、有意義な研修会となった。 - 卒業生を中心として2年生に実施した、学問別ガイダンス「カタリ場」は卒業生等の協力もあり、有意義なものとなった。大学説明会については、昨年までの大学に加え、4つの国立大学の説明会を行い、近畿圏以外の大学にも目を向けるような試みを行った。大学の講師により評価はさまざまであるが、一定の効果はあると思われる。
		教職員に対して小論文の指導研修を行い、全教員で指導できる体制づくりを行う。	B		
		外部講師や卒業生を中心とする大学生による講演会を行い、生徒たちが進むべき道に興味や関心を持てるようにする。	B		
	保護者や校内の他分掌、外部の団体と連携する。	保護者に対して学年ごとの説明会や入試説明会を積極的に実施し、本校の進路指導を広く理解してもらう機会を設ける。	A	B	- 保護者向け進路説明会はPTA主催のものも含め数多く行った。変化する入試に対して理解してもらうことが目的であるが、一定の評価は得ることができた。 - 教員対象の外部の説明会にも積極的に参加を呼びかけたが、授業の関係などですべてがうまくいったわけではなかった。また、参加した教員にその内容を全体のものにする手立てが全員に周知できておらず、変化する進学環境の共有化の徹底に課題が残った。 - 様々な場面において、他分掌と連携相談しながら進路指導を行ったが、時として十分な連携ができていない時があった。
		教員対象の就職説明会や入試説明会、入試研修会の参加を啓発し、全教員が変化する進学環境に対応できるようにする。	B		
		学校全体として進路指導に対して一致した指導ができるように、学年部や他の分掌と連携を密にする。	B		
教育企画推進部（広報）	前期入学者選抜の円滑な運営を行う。	昨年度の小さな課題を修正して、より円滑な運営を行う。	B	B	協力体制を整え、大きなミスのない運営ができた。
	校内のICT教育環境を整備し、教職員のICT利用の環境整備と支援を行う。	関係各分掌と連携して、校内のサーバやコンピューター環境の整備と安定的運用を図る。	B	B	ICT利用について、利用の便を図るための整備に取り組んでいる。
	本校を第1志望として選択してもらうよう、広報活動をより充実したものにす。	＜紙メディアを媒体とした広報活動＞ 関係各分掌と連携して、『スクールガイド』、『学校案内』、『@桃山2017』（年2回の広報紙）、『ポスター』を作成する。	A	B	- 特に「学校案内」と「@桃山」は質の高いものを作成できた。 - 魅力的な学校紹介DVDが完成し、広報活動の武器となった。 - 管理職や教務部長とも協力し、本校の教育活動の発信と情報収集ができた。 - 個別相談会を1回増やし、より多くの中学生とその保護者に本校の教育活動について知ってもらった。 - 副校長と協力して、ホームページをリニューアルし、効果的な更新に努めた。本校の魅力をアピールできたが、幅広い教育活動の発信、頻度の高い更新については、引き続き努力していきたい。 - 丁寧に対応し、本校の魅力をアピールできた。
		＜DVDを媒体とした広報活動＞ 本校の魅力を伝えるDVDを作成し、本校の教育活動を視覚的に伝える。	A		
		＜中学校等訪問＞ 中学校や関係機関に可能な限り訪問し、本校及び各学科についての説明を行う。	B		
		＜学校説明会＞ 中学生等を対象に計6回の桃山高校説明会を、また中学校教員等への説明会を企画・運営する。	B		
		＜ホームページの管理・運営＞ ホームページを頻繁に更新しながら、本校の教育活動に関する情報を積極的に外部に発信する。	B		
		＜中学生の本校訪問＞ 中学生の本校訪問に丁寧に対応し、本校及び各学科についての説明を行う。	B		

評価の基準 A：十分達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：ほとんど達成できなかった

分掌領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
教育企画推進部 (SSH)	3年間を見通した探究活動を推進する。	「GS課題研究」に、3年生を評価者役や助言者役として参加させる。（3年目：指導的立場）	B	B	・当初の計画通り、3年生全生徒の参加が達成できた。今後、課題探究力や主体的に取り組む姿勢等をさらに向上させる取組、また希望進路の実現につながるような実践等、より効果的な方法へと改善を進める必要がある。 ・1年生全員対象共通アンケートや3年生全員対象課題研究アンケートを実施することができた。 ・高大産連携講座の効果的な活用や探究型実験が導入できた。
		3年間の取組を連続的に把握できるようにアンケート調査を工夫する。	B		
		3年生での探究活動について、理科やGS科で実施している通常実験を工夫することで実施する。	A		
	「GS科目」間の連携を強化する。	「GSロジック」と「GSベーシック」と「GS自然科学」の指導内容を比較し、より効率的で効果的な指導方法を検討する。	B	B	・個々の科目の改善は進んだが、科目間連携による指導方法については、さらなる工夫が必要である。 ・3年間を見通した探究活動として、実践の工夫が進んだ。 ・3科目を連動させた指導方法は確立できなかった。
		「GSBASIC・GSベーシック（準備）」と「GS課題研究（実践）」と「3年次探究活動（振り返り）」を連動させた指導方法を提案する。	B		
		「GSベーシック」と「GSサイエンス英語Ⅰ」と「GSサイエンス英語Ⅱ」について、英語力の育成という観点で、より効率的で効果的な指導方法を確立する。	C		
	成果と課題の見える化を推進する。	次年度以降の科目担当者のために、教材集や指導例集を文書化する。	B	B	・GS自然科学やGS課題研究、GSベーシック等で学習教材や指導案などの文書化が進んだ。 ・課題研究評価用のルーブリックやGSベーシック教材、GSサイエンス英語教材を公開することができた。 ・職員会議や学校ホームページ、SSH運営指導委員会等で公開することができた。
		学校ホームページに、開発した教材等を公開する。	A		
		GS科目のアンケート結果等を、職員会議等で公開する。	B		
保健部	健康面での自己管理能力と、安全な生活を営む正しい判断力の育成のため、健康・安全教育を推進する。	学校医との連携により定期及び臨時健康診断を適切に行い、速やかな事後指導を通して自己管理の重要性を認識させる。	A	B	・学校医の協力のもと、すべての健診を適切に実施し、事後指導を速やかに行うことができた。次年度内科検診の実施方法の厳格化により健診時間がさらに長引くことが予想されるため、例年以上に日程調整が課題である。 ・薬物乱用防止教育（1年生対象）、性教育（2年生対象）の講演会を実施した。特に2年生には性感染症だけでなく、男女交際のあり方、DVや性的マイノリティの問題まで広く人権に関わる視点での内容で生徒の感想も良好であった。救急処置講習会を今年度より年1回実施とし、日程調整上夏期補習中となったが、その方が生徒・教員共に余裕が持ててよかった。 ・月1回の保健だよりの発行、文化祭でのパネル展示・リラクゼーショントレーニングなど、生徒保健委員会の活動は堅調であった。
		「薬物乱用防止教育」「性教育」講演会や救急処置講習会を実施し、健康で安全な生活を自ら作り上げる意識を醸成する。	B		
		生徒保健委員会活動（保健だよりの発行や文化祭企画）を通じて、健康安全の啓蒙活動をさらに主体的なものへと進化させる。	B		
	心身の健康に課題を抱えた生徒への支援の充実を図る。	生徒・保護者に対するカウンセリングの実施、カウンセラーの指導助言と教務部や担任団との情報共有のもと、組織的な対応の充実を図る。	B	B	・定期的な適応対策会議の実施、スクールカウンセラーとのコンサルテーションを通じて、情報共有に努めた。教務部に支援担当の教員が配置されたことで、夏の補習時の補充時間と場所の確保や、不適応から次の進路に向けての指導などを円滑に行うことができた。 ・特別な配慮を要する生徒について個別支援計画を作成し、教科担当者会議において情報共有を行い指導の方向性を確認した。また、年度途中で必要に応じ、京都府の巡回相談を利用した。発達障害について、大学支援室のコーディネーターによる教職員研修会を実施した。大学における支援の実態を通して、進学後に必要な力を確認できた。次年度の具体的実践につなげていく必要がある。 ・要配慮生徒への対応について、年度当初に教科担当者会議・職員会議にて情報共有した結果、生徒への対応も迅速にできた。引き続き、専門的助言のもと適切かつ丁寧な対応に努めていきたい。
		特別な配慮を要する生徒に対して教科担当者会議を機動的に開き、必要に応じて特別支援学校の巡回相談の活用や個別支援計画を作成する。	B		
		要配慮生徒についての情報を教職員全体で共有し、万一の場合に適切な対応がとれるようにする。	A		
	環境美化について関心を持たせ、環境保全を実行できる能力を育成する。	日常の清掃活動や定期的な大掃除を徹底し、学習環境を清潔・快適に保持するとともに、ゴミの分別、紙ごみの持ち帰り指導を徹底することでゴミの減量化に努める。	B	B	・大掃除、黒板消しクリーナーのフィルター洗浄、ゴミ箱洗浄など、定期的な生徒美化委員会活動を行い、校内美化に取り組んだ。 ・生徒の紙の持ち帰りやゴミ分別はほぼ定着し、ゴミ減量化が進んだ。分別意識については、教職員をはじめさらに指導の徹底に努めたい。 ・環境衛生検査はすべて実施できた。空気検査における二酸化炭素量は例年通り基準値を上回っており、意識的な換気が必要である。
		生徒美化委員会の活動を通じて、主体的な環境美化活動を展開する。	B		
		定期環境衛生検査（水質・照度・空気・薬品・ダニアレルゲン）を実施する。	A		

評価の基準 A：十分達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：ほとんど達成できなかった

分掌領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
図書部	本校の中核的なラーニングセンターとして位置づけられる図書館を目指した教育環境の整備を図るとともに、生徒の主体的な活動を育成するために、図書委員会活動を推進する。	図書館資料等の充実を図るとともに、コンピューター機器の更新により、図書館業務の安定化を目指す。	B	B	・月ごとのライブラリーニュースの発行などを通して、新着図書案内を充実させた。また、通年で学級文庫を設置するなど、生徒の読書活動にも一定の成果を得ることができた。 ・図書管理システムを年間を通して稼働させたが、サーバーの老朽化などの原因で図書貸出管理などが不十分になった面もあり、機器更新が課題である。 ・図書委員によるカウンター業務や年間を通した各係活動(広報、ディスプレイ、図書館整備)を実施し、生徒が主体的に図書館運営へかかわることができた。特に、11月に実施した「読書月間」においては、ヒプリオバトルやスタンプラリーなどに様々なイベントを企画し意欲的な活動を展開することができた。
		学級文庫の設置や新刊案内など、図書館外での読書活動の啓発を進め、学校全体で読書活動を深められる機運醸成に努める。	B		
		年間を通して図書委員による自主的な委員会活動を促進し、生徒目線の親しみやすい図書館を創造する。	A		
	本校教育の成果向上に寄与するため、関係分掌と連携し質の高い事業を実施する。	芸術鑑賞事業の実施を通して、文化活動を愛好する心情を育てるとともに、豊かな情操を養う。	A	A	・芸術鑑賞事業については、2、3年生は7月に演劇鑑賞、また、1年生は1月に落語鑑賞を実施し、それぞれ評価は高く、有意義な取り組みとなった。 ・校内読書感想文コンクールを実施し、読書感想文集を発行するとともに代表作品を選出の上、京都府コンクールに応募した。京都府コンクールでは本校生徒の作品が最優秀賞を受賞するなど、充実した取り組みとなった。 ・すべての教科との連携の下で推薦図書を募り購入した。また、様々な教科で課題学習などの授業で利用された。今後もアクティブ・ラーニングの推進に一層寄与できるよう利用形態や運営の改善を図ることとする。
		国語科と連携し、校内外における読書感想文コンクールの諸活動を行い、読書感想文集を発行する。	A		
		教職員による図書推薦や、関係分掌と連携し、SSH事業を中心とする課題研究学習等での利用を積極的に推進する。	B		
	ICT化時代を踏まえた新しい視聴覚機器・コンテンツの整備や充実を図る。	視聴覚教室及び視聴覚機器の整備、更新、充実を通して、教職員が利用しやすい環境を整える。	C	C	・教職員対象の機器操作講習会は実施したものの、視聴覚機器の整備や更新については十分に果たせなかった。今後、ますますデジタルコンテンツの活用を中心としたICT教育の充実が求められる中、機器更新等、教育環境の整備を最重要課題として位置づける必要がある。
		生徒用PCなどの機器更新を進めるとともに、魅力的なコンテンツの収集を通して、SSH事業をはじめとする本校の特色ある教育活動に貢献する。	B		
第1学年部	人間性豊かな生徒を育てる。	基本的生活習慣を確立し、本校の伝統である自主自律の精神を育む。生徒一人ひとりが高いレベルで勉強と部活動等を両立させようとする意欲と態度を育成する。	A	B	・登校指導・SHR等により、第1学年としての自覚を持たせることにより、学年を通して遅刻指導をする生徒はいなかった。 ・デジタル通信機器に潜む(LINE・ツイッター)問題点(SNSの使用等)を認識し、正しい使用方法について理解させた。また、ワランク上の文武両道の活動を通して、個人及び集団とのかかわり方について知識を深めた。 ・HR活動及び学校行事を通して、社会的責任を自覚を持たせることにより、スムーズな学年運営と集団活動をすることができた。
		人間の尊厳に対する自覚を高め、自他の生命と人権を尊重する態度を育む。	B		
		社会的規範意識の向上を図り、社会的責任を自覚させる。	B		
	主体的に学習に取り組む力を高め、学力の向上を図る。	学習内容の徹底理解に努め、基礎力を養成する。課題の提出等に関して教科担当と連携を密に取り、学習のための心構えを指導していく。	A	B	・教科・教科担当者との連携を密にとり、生徒の学習状況を把握するとともに、個人面談等を利用し、高校での学習に対する不安の解消に努めた。 ・個々の生徒の学習到達度を、模試等の結果を把握し、家庭学習の必要性を理解させた。生徒が学習時間を確保し、良質な集団の中で自学自習に取り組めるよう、自習室活用の啓発を行った。 ・考査・模試ごとに学習手帳等の確認を行い、平素の活用状況を把握することにより主体的に学習に取り組む習慣の大切さを理解させた。
		高校生としての真摯な学習態度を身につけ、あわせて予習・復習の定着と自学自習の習慣を確立する。自習室等も利用した自主学習1日2時間以上を習慣化する。	B		
		「学習手帳」と「ポートフォリオ」を活用させ、自らが考え学ぶ姿勢を身に付けさせる。	B		
	希望進路の実現に向けた取り組みの充実を図る。	自分の適性・能力などの発見に努め、将来の進路を明確にしていける。上級学校について調べる機会を作り、高い目標と意識を持たせる。	B	B	・進路研究シートを活用させるなどにより、自分の適性や能力を見極め、進路実現に向けて取り組ませた。 ・教務部および理科の担当者から、文理選択についての情報を的確に伝えるときに、理数教科担当との連携を深め、個々の生徒に応じた文理選択の実現に努めた。 ・模擬試験や学習到達度テスト等の結果から、現段階で生徒が抱える問題点の分析を行った。
		関係分掌と連携し、文理選択や科目選択等に役立つガイダンスや進路ホームルームを実施する。	B		
		客観的な学力実態を分析・把握し、適切な評価の在り方を関係分掌と連携を図りながら検討する。	A		

評価の基準 A：十分達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：ほとんど達成できなかった

分掌領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
第2学年部	学年の方針や生徒の状況等を教員間で交流し、他分掌と連絡を密にとりながら効果的な学年運営を目指して協力体制を整える。	分掌内外の発信と受信が学年団のメンバーに明確になるように努める。	A	B	・学年会をはじめとする種々の機会を通じてクラスの状況や生徒の状況について情報交換し、問題を抱える生徒の早期発見と指導に努め、学年全体で指導に当たった。また必要に応じて各分掌、各教科担当と連携をとって生徒指導に当たった。しかし、まだまだ改善の余地があり、次年度に向けての継続課題でもある。
		担任間でクラスの状況や個々の生徒の状況を交流し、学年全体で統一した指導体制を作る。	A		
		他分掌とも情報を共有し、連絡・連携を密に図り、必要があれば協力を求めて学校としての指導を行う。	B		
	自主・自律の精神のもと、生徒一人ひとりが主体的に学習する力、部活動や各種行事等にも意欲的に取り組む姿勢を育ててゆく中で、豊かな人間性を身に付けた、成熟した生徒集団の形成を目指す。	ベル着の励行。授業開始、終了の挨拶の徹底。出席状況や課題の提出等に関して教科担当と連携を密に取り、学習のための心構えを引き続き指導していく。また教室の美化に努めることで、学習環境を整え、学習効果を向上させる。	B	B	・概ね落ち着いた環境の中で、生徒は集中して学習に取り組めた。教科担当と連携を密にとり、学習面で問題を抱える生徒や課題の未提出が著しい生徒への対応は積極的に行った。しかし、学習意欲に関してはまだまだ個人差があり今後の課題でもある。 ・社会生活を営む上でのマナーやモラルは概ね身につけているように思えるが、通学時の交通ルールについては改善してゆく課題である。携帯電話、スマートフォンの着信による生徒指導があったことも次年度への継続課題である。 ・クラス活動や学校行事では生徒は意欲的に活動していたが、自ら企画、運営してゆくまでには至らなかった。次年度に向けては、生徒が何事にも自主的に取り組んでゆく姿勢を身に付けさせることや、リーダーシップを発揮して他の生徒の活動を促してゆく生徒の育成を心がけ、学年全体をより活気あるものにしていきたい。
		挨拶や正しい言葉遣いを指導する。引き続き遅刻防止指導を強化し、基本的生活習慣の確立に努める。研修旅行を控え、集団の中での個人の責任を自覚させ、日常的に実践させる。携帯電話・スマホの使用や自転車の通行マナーについて指導を強化する。個人面談等を利用して、生徒が理解・納得するように働きかけ、信頼関係を築いていく。	B		
		クラス活動や学校行事について担任間で協力体制を作り、学年全体で運営していく。また部活動等において、生徒一人ひとりが上級学年としての自覚を持って行動できるように指導し、中心的な立場を担わせていく。	B		
	自然科学科、普通科理系・文系の生徒の希望進路の実現に向け、それぞれのコースに応じた進路情報を提供し、さらなる意識の啓発に努める。	進路指導部と連携してオープンキャンパス等の各種機会を活用して、具体的な進路目標の設定に取り組む。	B	B	・「オープンキャンパス」「桃山版カトリ場」「志望理由書作成」等の進路行事を通じて進路情報の提供に努めた。進路目標設定の時期について、生徒間の個人差が大きいのが実情であり、今後の課題でもある。 ・個別面談を通じて生徒の実態把握に努めるとともに、適切なアドバイスを行うことで、生徒は進路目標を安易に設定するのではなく、高い目標に向けてチャレンジする姿勢をはぐくんできた。来年度は各分掌、特に進路指導部と連携を保ちながらそれぞれの進路目標の実現に向けた取組を心がけていくことも課題である。
		LHRの進路学習を系統的に実施し、必要な進路情報の提供に努める。	B		
		個別面談を丁寧に行い、生徒の実態把握と必要なアドバイスの機会を拡充する。安易に妥協して進路目標を設定するのではなく、向上心を持ってより高い目標にチャレンジする姿勢を育てる。	A		
第3学年部	様々な活動をクラスおよび学年全体で協力して取り組ませることにより、やり切ることの充実感・達成感を感じさせる。	部活動については最後までしっかりやり切り、文化祭へ向けにはクラスの中で助け合いながらレベルの高い演劇を創造することで、達成感を味わうとともに、互いに切磋琢磨し、学校全体が個人を応援するムードを作り上げる。	A	A	・多くの生徒が、最後まで部活動をやりきることができた。体育系クラブの中には全国高等学校総合体育大会に出場した部もあった。学校行事にも進路実現に向けての学習活動と両立させて、クラスで一致団結して取り組むことができ、結果にかかわらず充実感や達成感を感じるような活動ができた。
	進路希望に応じた自発的な学習を啓蒙し、志望校決定へ向けて積極的に取り組む姿勢を醸成するために必要な情報の提供の仕方を検討していく。	昨年度に引き続き、国公立大学の推薦入試等を見据えて、客観的な学力実態を分析・把握し、関係分掌と連携を図りながら進路指導に努める。	A	B	・「自らの力で自らの学力を高めることができる能力を身に付ける」ことをテーマにして一年間取り組んできた。その実現のために、生徒には模擬試験等の結果から自らの学力を客観的に捉えることで課題を発見し、その克服に向けて学習手帳等を利用しながら計画的に学習に取り組めるように指導した。 ・各クラスの生徒を担当一人が抱えるのではなく、「チーム学校」の考え方を元に第3学年部と進路指導部を中心に、学校全体で生徒の実態把握や学習指導にあたるように心掛けた。 ・高い進路目標を持たせることで、98%を超える生徒が「大学入試センター試験」を受験し、最後まで自身の進路実現に向けて粘り強く努力することができた。その結果、多くの生徒が希望進路の実現につながった。
		生徒には「自己の理解」と「大学入試システムの理解」に努めさせるとともに、個々の能力や個性に応じた進路指導を行うための検討会を学年と進路指導部が共同で実施する。	A		
		スタディーサポートや模擬試験の結果を分析し、課題等を早期に発見して教員の共通認識を図るとともに適切な対策をとる。ベネッセコーポレーションの進研模試デジタルサービスを活用して自発的に学習できるように指導する。	B		
		LHRの進路学習を系統的に実施し、進路情報の提供と自己理解及び志望校の決定に努める。進路指導部と連携し、上級学校について調べる機会を作り、高い目標と意識を持たせる。	A		
		学習手帳や種々の資料を活用し、自主学習の十分な時間の確保を習慣化させることを目標とする。また自習室の効果的な利用を促す中で自ら学力を高めることが出来る資質を育成する。	B		
		基本的生活習慣を充実させ、規範意識や社会性、コミュニケーション能力を高め、成熟した生徒集団を育成する。	B		
	基本的生活習慣を充実させ、規範意識や社会性、コミュニケーション能力を高め、成熟した生徒集団を育成する。	自主自律の校訓のもと、自らの行動に責任を持って行動し、高校生として協働性を備え主体的に社会に貢献しようとする志を身に付けさせる。	B	B	・3年間かけて個人が子どもから大人へ成長したことで、集団としても安心して見ていられる集団に成長できたように思う。 ・指定校推薦やAO入試によって早い段階で進学校が決定した生徒たち中にも、土曜学習会や冬期補習に参加する生徒が多数存在し、一般試験に向かう生徒たちの学習環境を乱さないように取り組むことができた。来年度以降、このような生徒の取り組み方が桃山高校のスタンダードになっていけば、更に好結果をもたらすことができると考える。
		高校生としての挨拶や正しい言葉遣いを指導する。遠方から通学する生徒の増加に伴い、引き続き遅刻防止指導を継続する。また自転車通学の生徒にはルールやマナーを守り、自他共に安全な交通環境づくりに貢献させる。	A		
		主権者教育の一環として社会と共生するための相互尊重のルールを身に付け、民主的な社会の維持・発展を図るために必要な知識や見方・考え方を習得し国家・社会の形成者としての資質を育む。	B		

評価の基準 A：十分達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：ほとんど達成できなかった

分掌領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
------	------	-------	----	-------

学校関係者 評価委員会 による評価	・「主体的・対話的で深い学び」への授業改善については、是非実践してもらいたい。学力向上にも寄与するはずである。 ・進学補習に力を入れ、年々進学実績が向上している現状は素晴らしいが、自由で多様性があり生徒それぞれが個性を伸ばせる学校でもあってほしい。 ・補習教室が足りないなど施設面での課題が多い現状であるが、ＩＴ化やディベートなどができる教育環境作りなどに努めてもらいたい。 ・若い時代に、自分の限界に挑み打ち込んだ経験は社会で生きるものであり、勉強や部活動にあれだけ頑張ったという経験ができる場であってほしい。			
-------------------------	---	--	--	--

次年度に向けた改善の 方向性	・「主体的・対話的で深い学び」への授業改善について、研修会・先進校視察・公開授業等を充実させるなど、年度当初から学校をあげて計画的に取り組み、生徒の思考力・表現力等の育成に努める。 ・SSH事業が桃山高校の文化として定着できるよう、課題研究等の取組に一層力を入れ内容を充実させるとともに、SSH委員会の活性化をはじめとして、２年後に３期目指定を獲得するための学校体制を再構築する。 ・新しい大学入試制度に対応するため、英語の４技能育成や国語・数学における記述力の向上など各教科における指導課題を確認する。また調査書変更に伴う生徒データの蓄積方法を検討する。 ・国公立大学対策として組織的な指導を実施し、国公立大学現役合格者数を昨年度からさらに増加させることができたが、次年度は一層の二次力向上を図り生徒の希望進路実現に應える。 ・生徒の規範意識を高めるため、スマートフォン等の適切な使用や自転車の法令・マナー遵守等に関する指導を継続する。また個別支援計画や適応対策会議を活用して支援の必要な生徒に対する丁寧な指導を継続する。			
-------------------	--	--	--	--